責任論の位相ーコロナ禍とメディア報道

日時　9月27日（月）10:00～12:00
題目 「責任論の位相ーコロナ禍と新聞社説」
報告１：山腰修三（慶應義塾大学）・三谷文栄（日本大学）「朝日新聞ー民主主義的コミュニケーションをめぐる危機とその批判」
報告２：大賀哲（九州大学）「毎日新聞ー社会格差の顕在化」
報告３：加藤朋江（福岡女子短期大学）「読売新聞ー「国家」の前景化と弱い政権批判」
討論者　市川顕（東洋大学）
座　長　大山貴稔（九州工業大学）

- **セッションの背景**
  このセッションの登壇者（4名）は、原発報道についての社説分析を行っていた（2019年研究大会＠同志社大学で報告）。

- **セッションの趣旨**
  セッションの趣旨は、メディア報道における責任論の位相である（どのようなトピック、どのようなアクターを対象に、どのような論調で「責任」が語られているのか）。今回の報告では、コロナ禍の報道に焦点をあて、三紙の社説を比較分析した（2020.1.1 ～ 2021.7.31）。

- **なぜ社説なのか？**
  社説は、スピードが重視される通常の報道記事とは異なり、幅広い公的な論点・争点に関して論評を行うテキストであり、メディアとしての客観的・公平性・中立性というフレームと各紙独自の独自性というフレームが交錯する興味深い題材である。また、データベースを通じて、トピック別に定時的かつ共時的な分析が可能である。

- **なぜ責任なのか？**
  社会で起きている事象は、それが言説を通じて社会の構成員に認識・共有されることで社会問題として認識される（社会問題の社会学）。人は「社会問題」という言説が社会に流通する際、どこに着目するのだろうか？問題の背景や原因、あるいは問題解決のための解決策に注目するというのが一般的かもしれない。だが、同時に、原因や解決策を論じる際に、特定のアクターの責任を論じる場合も少なくない。例えば、貧困や差別は、個人の責任なのか、社会の責任なのか。そうした問題を是正する責任は誰にあるのか。そう考えると、社会問題の構造に着目するときのひとつの視角が「責任」であると言えるし、特定の社会問題が争点化する過程で、どのような責任論が、責任があるとみなされるアクターに対して、どのような論調（肯定的なのか、否定的なのか）で語られるのかという点は避けて通ることが出来ない。厳に、原発報道でもコロナ禍の報道でも、責任に言及した言説は非常に多い。そのため、この報告では、責任という視角から、コロナ禍の報道を検討していきたい。

- **リサーチクエスチョン**
  ①各紙が考えている責任とは何か？
  ②現状でその責任は果たされているか？
  ③責任が果たされていないとすれば、その原因はなにか？

- 朝日・毎日・読売の三紙はそれぞれ異なった視角からこの問いに答えようとしている。朝日は責任を果たす上での障害は政府にあると考える（政府の責任）。毎日は、政府批判をしつつも、社会格差などの構造問題がコロナ禍でさらに顕在化していると考える（社会の責任）。対して、読売は責任を果たす上で国民の自助を強調している（自己責任）。以上、三紙の分析から、コロナ禍におけるメディア言説とその多様性を検討していく。